

コロナ禍における群馬県内の 美術館連携事業の実践に関する報告

奥 西 麻 由 子

Report on the Practice of Museum Collaboration
Project in Gunma Prefecture in COVID-19 related crisis

Mayuko OKUNISHI

I はじめに

本研究は、筆者が2013年度から継続して群馬県内における美術館での連携事業を進めてきた実践のうち、2020年3月以降、コロナウイルス感染拡大防止のため、従来の実践とは異なるかたちで展開した事業の報告を行うものである。これまで、群馬県立女子大学紀要35号（2014年）「富岡市立美術博物館における学生による教育普及プログラムの開発と実践」¹⁾ および、同紀要38号（2017年）「群馬県立館林美術館における教育普及プログラムの開発と実践」²⁾ に関しては、学生が教育普及プログラムを考案し、実施するというかたちで報告を行ってきた。また、同紀要41号（2020年）「高崎市立美術館における連携事業の実践に関する報告」³⁾ では、学生が夏の企画展示に作品展示ボランティアや学芸員実習の一環として教育普及事業のサポートを行うといった新たな取り組みの報告も行ってきた。

しかし、昨年のコロナウイルス感染拡大と共に、内閣官房新型コロナウイルス感染症対策推進室から人流の制限、人と人との接触機会の減少、催物の開催制限、施設の使用制限などが次々と提示され⁴⁾、感染の拡大化においてはより強い措置を講じる緊急事態宣言⁵⁾、まん延防止等重点措置⁶⁾が発令された。このような状況下において、人々の生活はもちろん、美術館・博物館といった文化施設も様々な制限下におかれた。これまで活発に実施されてきた教育普及事業はもとより、企画展示や常設展示といった施設の根幹を成す事業にも影響は及んでいる。また、宣言下においては学生や教員の授業、課外活動にも制限がかかるため、従来のような姿勢では事業自体を継続することが困難な状況になった。

とはいえ、長引くコロナウイルス感染拡大を理由に、文化活動を止めるのではなく、社会情勢に見合った柔軟な発想や展開を考案し、学生や文化施設にアクセスする人々の学びを止めない方法を模索することが重要である。そこで、本稿では、群馬県内の5つの美術館で、未だ収束する兆しが見えないコロナ禍（2020年4月～2021年8月）に実施した連携事業の実践に関する報告を行い、未曾有の事態ともいえる状況下における事業の在り方の一つを提示する。

II コロナ禍における美術館の変化

冒頭で述べた通り、コロナウイルス感染拡大の影響は博物館、美術館を含む様々な文化施設に及んだことは周知の通りである。感染拡大化においては来館者で密になる⁷⁾ことはほとんど見られない地方の美術館も休館、事業の延期、中止を余儀なくされている。特に県や市町村管轄の公立の文

化施設は行政の指示に従いわざるを得ない。そのため、2020年3月以降⁸⁾ 感染状況に応じて全国の美術館は予定していた事業を変更、中止等に対応することも多くみられるようになった。美術館全体を通してこのコロナ禍で変化したことといえば、次の3点が挙げられる。

1つ目に、開館に際して感染防止対策の徹底が優位な状況にあるということである。公益財団法人日本博物館協会が令和2年5月14日（令和2年9月18日改定）に出した「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」には以下のように記載されている。

5. 展覧会（常設展示・屋外での展示を含む。）の実施に際して講ずべき具体的な対策

①総論

- ・大声での歓声・声援等がないことを前提としうる場合は、密が発生しない程度の間隔（最低限人と人が接触しない程度の間隔）を確保することが前提。
- ・感染防止のために入館制限を実施することが必要な場合は、施設の状況に即した方法の導入が求められる。例えば、以下のような方策が考えられる。
 - 入館可能時間、入館可能な人数の制限 等
 - 大人数での来館の制限 等
 - 日時指定予約や時間制来館者システムの導入
 - 招待制の導入
- ・各博物館は、リスク評価の結果を踏まえ、施設が所在する都道府県の知事からの要請等に留意し、館内外における過密解消、感染拡大防止に向けて必要な対応を取ることが求められる。
- ・『リスク評価』の結果、具体的な対策を講じても十分な対応ができないと判断された場合は、展覧会は中止又は延期とし、館内のガイドツアーや各種プログラム（ギャラリートーク、ワークショップ、学校用プログラム、子供向け体験プログラム等）についても同様の扱いとする（同様に、第三者に施設を貸し出し行われる公演等の開催についても、当該公演等の主催者に対して開催の自粛を促す。）⁹⁾

このように、展覧会の開催に当たり具体的な対策が提示されたことを受け、各館は休館中などの間に、感染防止対策の徹底を行った。自治体によれば、館職員のみでなく、県の文化振興課等から担当者が出向き、指導・助言を行って対策をしている。このような対策はいかに魅力的な展覧会を開催し、多くの方に足を運んでもらうかというこれまでの館のミッションを達成するものとは異なり、「リスク評価」¹⁰⁾を念頭に置き、感染防止対策の下で安全に開館することに重点を置かれたものとなっている。そのため、同じく本ガイドラインでは、

博物館を管理する者（以下「施設管理者」という。以下同じ。）及び公演主催者は、対処方針及び事務連絡の趣旨・内容を十分に理解した上で、本ガイドラインに示された『感染防止のための基本的な考え方』、『リスク評価』及び『展覧会（常設展示・屋外での展示を含む。）の実施に際して講ずべき具体的な対策』を踏まえ、展覧会の実施に関する様態等も考慮した創意工夫も図りつつ、新型コロナウイルスの感染防止に取り組むとともに、社会基盤としての役割を継続的に果たすよう努力することが求められます。¹¹⁾

と記載され、感染防止対策と文化施設としての役割の両立を求められることとなった。このガイドラインをもとに各館はそれぞれの事業を組み立て、計画し、実施していく事なる。しかし、リスクのほうが高いとされた場合は「各種プログラムの自粛」と記されていることから、近年活発に行わ

れてきた教育普及プログラムを主とする事業は縮小を余儀なくされ、館の方針によっては一切開催しないという状況も起こっている。

2つ目に、企画展示の開催が困難になり、所蔵作品などを活用した展示が多くなったという事である。一般的に美術館は数年先の企画展示の計画を立て、担当者が準備をしている。国立、県立など規模の大きい館が大規模な展覧会開催が可能のためよりその傾向が強い。また、そのような企画展示を開催するに当たり、全国はもとより海外の美術館ともネットワークを持ち、作品の貸し出し等を行っている。そのためひとたびスケジュールが変更となると、他館との関係もあるため、会期を延期しての実現は困難である。また、コロナウイルスの影響は世界の美術館にも及んでいるため、特に海外の作品を日本に運搬することが出来ないといったような状況が見られた。このことは都市部の大規模な美術館のみでなく、地方の美術館においてもその影響は決して小さなものではない。そのため、年間スケジュールを変更したり、リスクの少ない展示方法を模索する中で、各館所蔵の作品のみで構成する企画展示を新たに設けるなど対応に迫られることとなった。このことはこれまで著名な作品の鑑賞を主に美術館に足を運んできた客層には新鮮味は少ないといえるが、これを機会に所蔵品や地域の作家に焦点を当てることが可能になったといえる。

そして3つ目に、オンライン上でのコンテンツの充実を試みるようになったということである。2020年4月に初めて緊急事態宣言が出された際、多くの文化施設が休館を余儀なくされたが、ここでは会期中の展覧会が終了する、または開催そのものが中止に陥るといった状況も多々見られた。そこで展覧会の内容や、普及事業の一環である学芸員によるギャラリートークなどが動画撮影され、各館のホームページにアップされるようになった。例えば群馬県は、文化振興課から各県立文化施設へ動画作成の依頼があり、担当者が各館の特色を生かしたコンテンツの発信を試みている¹²⁾。

また、2020年3月にスタートした北海道博物館発起の「おうちミュージアム」は、全国のミュージアムに広がり、子どもから大人まで一緒に楽しめる、ユニークな学習コンテンツをweb上に公開している。これは当時学校の休校を余儀なくされた子どもたちへのコンテンツとしてスタートしたが、博物館を中心に美術館も参加し、実際に館内で配布する資料や工作キット等が家で楽しめるものとなっている¹³⁾。

このような取り組みは発信者側の一方向のため受け手側がどのような反応をするかは定かではないが、コロナ禍で外出自粛が要請される中、文化施設の学びを継続するという意味において、デジタル化が進む現代だからこそ提供できるコンテンツだといえる。また、大学生はもとより小・中・高校生の授業での活用も期待できる。さらに遠方のため足を運ぶことが出来ない人や、障害があつて文化施設に赴くことが困難な人など、多様なニーズに答える一つの手立てとして大変有効なものに位置づけられるようになってきた。この取り組みは美術館の再開以降も継続されることが多く、今後の美術館の広報媒体の一つとして活用されていくと考えられる。

Ⅲ 連携事業の内容

1. 大学における授業と感染防止対策

以上のように美術館自体がコロナ禍で変化をしてきた中、これまで行ってきた教育普及事業の一環としての本学との連携事業も同様に少しずつ形を変えて変化をせざるを得ない状況となった。

2020年は大学の授業も、例年4月に開始する講義が一か月ほど遅れ、準備期間を経て5月から遠隔授業での対応となった。2020年度の大学の方針として、原則遠隔授業、6月22日以降対面授業を希望する授業のみ申請をして学内での講義が出来ることとなった。その際はマスクの着用、机、椅

子の消毒、教室定員の削減、換気等のガイドラインのもとに実施し、本研究に係る授業やゼミのような発話、ディスカッションを伴う授業においては別途大学が定めるガイドラインのもと、感染防止対策を徹底したうえで進めることとなった。しかし、感染が不安な学生、体調が悪く欠席した学生に対してはハイフレックス型での対応も行った。つまりこのような制限の中で連携事業の企画、実施を行わなければいけない状況であった。

2021年前期になると大学は全面対面授業に戻り、感染対策はこれまで通り行ないながら、学内での講義が可能となった。昨年と比較すると授業自体はさほど問題なく進行することが出来た。しかし、群馬県の警戒度や学内の警戒レベルの引き上げ、または群馬県のまん延防止等重点措置や緊急事態宣言が出されるごとに学生の課外活動の制限がかかるため、連携機関とのすり合わせや学生引率に支障が出ることもあった。

2. 美術館連携事業の内容

(1) 2020年度の実践内容

① 5～8月：富岡市立美術博物館における実践

これまで富岡市立美術博物館では、2014年より継続して「アートマネジメント演習1」の授業で子どものためのプログラムを開発し、「夏休みわくわくワークショップ」として、各プログラムを美術館で実践してきた¹⁴⁾。しかし、2020度は本学の授業が原則遠隔授業になったこと、美術博物館の休館や現場での連携事業が困難なため、異なった形でのプログラム開発、連携事業を行うことになった。このような状況下でも富岡市内の子どもたちに造形体験を伴う効果的なプログラムはないかと美術館学芸員及び職員と協議を重ね、その方法を4月まで模索した。そこで、授業を受講する学生29名が5グループを編成し、以下の2つの内容を試みることにした。

1つ目は「おうちでわくわくワークショップ造形レシピ集」の冊子を作り、配布するものである。子どもが家にある身近な材料で作ることの出来る造形を考案し、まとめた造形レシピ集を開発し、美術博物館に提供した。学生たちは遠隔授業中にはGoogle classroomのmeetの機能を使い、アイデアの共有や自身の試作について話し合いを重ねた。その後対面授業が可能となってから、ページごとに素材を検討し、イラスト入りのレシピを作った(図1)。また、冊子の配布のみでは一方向の発信にしかならないという事で、レシピを試してみた方にネット上で作品を共有できる場も設けることを試みた¹⁵⁾。

2つ目は「おうちでわくわくワークショップ工作型紙キット」を開発し、学内に学芸員を招き、プレゼンテーション(図2)によって選出された「飛べ!カイコ!」と「ぐんまちゃんのわくわく



図1 「造形レシピ集」



図2 プレゼンテーションをする様子

ファッションショー「福沢一郎コレクション」(図3)の2つを印刷し、市内幼稚園、保育園、小学校に配布した¹⁶⁾。他のグループの型紙は美術博物館ホームページに掲載し¹⁷⁾、ダウンロードして楽しむことが出来るようにした。また、子どもたちとの双方向的な交流を試みるために「#おうちでわくわくワークショップ」と付けてのInstagramへの投稿も呼びかけてみたが、残念ながら投稿はなかった(図4)。



図3 開発した工作型紙



図4 Instagram

この実践では現場で交流することは難しくても、対象となる子どもたち

をイメージして学生それぞれがアイデアを持ち寄り、造形活動の手助けとなるようなきっかけを作ることが可能になることが分かった。しかし、美術館で参加者の反応を見ながら実践を行うものとは異なるため、やはり一方向的な活動に留まることとなった。

②8月：群馬県立館林美術館における実践

7回目の開催となる館林美術館では、昨年同様夏の企画展示に合わせて、感染症対策を徹底した上で学生によるワークショップを行うことが出来た。ワークショップ概要は以下の通りである。

【プログラム名】	自分だけのミニチュアハウスを作ろう
【プログラム概要】	家の型紙を切り、のりで組み立てて、窓やドア、屋根などをシールおよびマスキングテープでデコレーションして、自分だけのミニチュアハウスを作る。
【開催時間】	11:00-15:30 (30分ずつ5回実施)
【開催場所】	別室ワークショップ室
【準備・用具】	型紙、はさみ、のり、マスキングテープ、ホイルシール折り紙、丸シール、消毒液、アルコールウェットティッシュ
【企画・実施】	アートマネジメントゼミ4年生 5名、3年生4名
【参加人数】	計87人

例年同様、企画展示「安野光雄 風景と絵本の世界」に合わせ、幼児～小学生を主に想定し、大人も楽しめるようなプログラムを考案した。展示に登場する家をモチーフに学生が考案した型紙を使用し、参加者が自由にシールやマスキングテープでデコレーションし、オリジナルの作品が完成した(図5)。企画立案の際は学生同士が話し合う場合は遠隔対応も可能であったが、対面授業が再開されてからはゼミも対面に切り替え、実物の試作等に当たった。企画にあたっては現地開催が出来ない場合、型紙を美術館のホームページからダウンロードして使えるようにと配慮した。

当日無事に現地開催が可能となったが、感染症対策として、美術館側は事前予約制を導入し、30分ずつ6組を家族単位で着席してもらうようにした。学生は各ブースに一名着席し、作り方の説明を行った(図6)。その際、必要最低限の事柄を伝え、参加者が使用する材料を触ることなく対応した。また入れ替わりの時間に机等のアルコール消毒を行った。予約制を導入した点に関しては、開始日からたくさんの人に興味を持ってもらい、倍率は4倍以上のものとなった。抽選に漏れてしまう人もいたため、美術館ホームページで学生が撮影した作り方動画を挙げ、型紙をダウンロードして使えるようにした¹⁸⁾。



図5 学生が作ったサンプルのミニチュアハウス



図6 感染対策を行ってサポートする学生と会場の様子

③11月～12月：大川美術館における実践

2回目の連携事業となる大川美術館では、昨年同様5月のゴールデンウィークにワークショップの企画を検討していたが、緊急事態宣言で休館を余儀なくされ、実施に至ることが出来なかった。そのため、今回は集客を促す事業は困難であると判断し、他の手段で桐生市民および全国の人々に、コロナ禍においても美術館を身近に感じてもらう企画として、大川美術館のSNS⁽⁹⁾の中で学生が感じたことや伝えたいことを記事として取り上げてもらう情報発信プロジェクトを実施した。概要は以下の通りである。

【プログラム名】	大川美術館を楽しむ！女子大生目線の広報プロジェクト
【プログラム概要】	学生が美術館を訪問し、自由に作品を鑑賞する。その後学芸員にインタビューを行いテーマに沿って学生が美術館の紹介文章を書く。学芸員のチェックを経て、記事としてSNSでの発信を行う。
【訪問日】	11月11日10：30-14：30
【スケジュール】	10：30～ 挨拶、館内作品自由鑑賞、企画展「広島市現代美術館所蔵作品を中心に Part 1 鬘光と同時代の仲間たち」、「丸尾康弘展今、こどもたち」鑑賞 12：00～ 昼休憩 13：00～ 学芸員への質問、インタビュー 13：45～ 館内自由散策、写真撮影等 14：30 終了、挨拶
【実施】	アートマネジメントゼミ3年3名
【SNS情報内容】	女子大生が選ぶ「私のお気に入り作品」、「大川美術館クイズ!」、「女子大生が語る！大川美術館の魅力」、「女子大生が注目！大川美術館のココ」
【SNS発信日】	2020年12月1～6日、15日～19日、22日～24日



図7 館内の作品を鑑賞する様子



図8 学芸員にインタビューする様子

参加したゼミの3名のうち2名は初めて訪れる美術館であったため、新鮮な面持ちで館内を回り、作品鑑賞を行っていた(図7)。自由に館内の作品を鑑賞した後、実際に学芸員に質問をする(図8)ことで、大川美術館についての理解を深め、さらにSNSで発信したいと思われる情報を集めるような視点を持ち館内を再度鑑賞した。どの学生も展示作品で印象に残ったものや個性的な建築に興味を持ち、自身の言葉で館を紹介するように努めていた。担当学芸員は毎日SNSで情報を挙げていたが、職員のみ視点でなく、学生の立場から作品等を改めてみることでこれまでと異なった観点からの情報が発信できたと述べていた。このような活動はただ美術館に赴き、作品を鑑賞するだけでなく、他者に向けての発信を意識することでアートマネジメントの視点を養うことに繋がるきっかけにもなった。

④2月～3月：群馬県立近代美術館における実践

8回目の参加となる「美術館アートまつり」は、感染症対策を徹底した上で、事前申し込み、定員をもうけて2021年2、3月の第2日曜日に開催した。本事業は子どもから大人まで全てのプログラムに無料で参加できる。この日は美術館スタッフ、ボランティア、アーティストによる複数のプログラムが実施され、主に幼児～小学生を中心とした親子連れの参加が多くみられた。例年に比べると午前、午後の定員が100名だったため、各コーナーゆったりと造形活動を楽しむ様子が見られた。各ワークショップ概要は以下の通りである。

2月実施

【プログラム名】	ふわふわかわいいタオルペット♥
【プログラム概要】	五色のハンドタオルを使用して、中に新聞紙を丸めて詰め、モールやゴムで止めて人形を作る。目、鼻、口は白いラベルシールにマーカーで描き、はさみで切って貼り、自分だけのタオルペットを作って遊ぶことが出来る。
【開催時間】	10:00-12:00、13:00-15:00
【開催場所】	展示室
【準備・用具】	おしぼりタオル、白シール、輪ゴム、マーカー、はさみ、新聞紙、セロテープ、カラーモール、消毒液、アルコールウエットティッシュ
【企画・実施】	アートマネジメントゼミ4年生4名、3年生3名
【参加人数】	午前 大人43人、子供36人 計79人 午後 大人46人、高校生1人、子供39人 計86人

3月実施

【プログラム名】	おかしなスポンジケーキ
【プログラム概要】	ホワイトデーにちなみ、カラフルなスポンジに毛糸やホイップ粘土、ビーズ、リボンなどをデコレーションしてまるでケーキのような作品を作る。作った作品はランチボックスに入れて持ち帰れるようにした。
【開催時間】	10:00-12:00、13:00-15:00
【開催場所】	展示室
【準備・用具】	スポンジ、デコレーション材料数種、ボンド、はさみ、新聞紙、ビニール袋、ランチボックス、消毒液、アルコールウエットティッシュ
【企画・実施】	アートマネジメントゼミ3年生4名、4年生1名
【参加人数】	午前 大人48人、子供43人 計91人、午後 大人45人、子供45人 計90人

群馬県立近代美術館では2019年3月に実施予定だった「ふわふわかわいいタオルペット♥」が感染拡大防止のため休館となり、実施が出来なくなった。そのため1年後の2月に実施するに至った。企画を主に行った4年生がメインとなり、3年生に作り方を伝えて実施した。3月の「おかしなスポンジケーキ」は3年生が主となり企画を練ることが出来た。美術館の方針として事前予約制をとり、約1か月前からの申し込みを受けつけた。これまでのアートまつりでは例年200人～300人近くの参加者を当日受付で対応するものだったため、大勢の参加者で密になることが多かった。今

年はそのようなことが起こらないように全体として参加できる人数を絞って実施した。また、広い展示室の空間を会場にしたり、1つのプログラムに集中しないようスタッフやボランティアが空いているプログラムから参加するよう誘導し、分散して体験できるような配慮を行った。それぞれのブースでは、机一つにつき家族単位での着席(図9)を促し、参加者が自由に素材を取ったり戻したりすることのないよう、トレーに必要な材料を入れ、キットのような形式にして選択してもらうようにした。(図10) これまでは様々な材料を自由において選ぶようなこともできたが、コロナ禍においては接触を避けるということが必要になったため、主催者側、参加者側が安全にプログラムを実施できるよう新たな対応を考えながら行うこととなった。参加者は申し込み開始から順調に増え、当日までに定員になった。ワークショップに参加したいという意識が高い人が親子で楽しみながら来館したようにみえた²⁰⁾。



図9 2月の会場の様子、家族単位で着席する



図10 3月の会場の様子、受付でキットにして材料を配布する

(2) 2021年度の実践内容

① 7月：富岡市立美術博物館における実践

2021年度は対面授業が再開され、「アートマネジメント演習1」の授業での企画したプログラムは美術館で実践可能となった。7回目となる「夏休みわくわくワークショップ」は、感染症対策を徹底した上で、事前申し込み、定員をもうけて7月22日に開催した。本事業では授業受講者が4つのグループに分かれ、プログラムを開発、当日参加者は時間の範囲内で複数のプログラムに参加できることとした。各ワークショップ概要は以下の通りである。

グループA 企画

- 【プログラム名】 カラフルなまんまるうちわを作ろう
- 【プログラム概要】 折り紙と割り箸を使って、夏らしくかわいいまんまるのうちわを作る。
- 【開催場所】 創作室
- 【準備・用具】 折り紙、割り箸、セロテープ
- 【企画・実施】 3年生5名、4年生2名

グループB 企画

- 【プログラム名】 皆でつくるフォトスポット
- 【プログラム概要】 画用紙とセロハンを使ってスタンドグラスに見立てたパーツを作り、皆の作品を組み合わせ、後日共同制作作品として富岡市内のポケットパークに設置する。
- 【開催場所】 視聴覚室
- 【準備・用具】 黒画用紙、セロハン、セロテープ、油性マーカー、クリアファイルで作った型
- 【企画・実施】 3年生5名、4年生1名、大学院1年生1名

グループC 企画

- 【プログラム名】 海のモビールを作ろう！
- 【プログラム概要】 貝殻やビーズ、海の生き物のパーツを使って、モビールを作る。
- 【開催場所】 市民ギャラリー
- 【準備・用具】 貝殻、ビーズ、糸、割り箸、画用紙パーツ、モール、セロハンテープ
- 【企画・実施】 3年生4名、4年生3名

グループD 企画

- 【プログラム名】 オリジナル浴衣で夏祭り気分を味わおう
- 【プログラム概要】 学生が作ったカラフルな浴衣にシールでデコレーションし、フォトスポットで撮影を楽しむ。
- 【開催場所】 市民ギャラリー
- 【準備・用具】 カラーポリ袋、シール数種、スズランテープ、(事前準備) 花火映像、プロジェクター
- 【企画・実施】 3年生4名、4年生2名

全プログラム共通

- 【開催時間】 10:00-12:00、13:00-15:00
- 【参加人数】 午前 93人、午後 84人 計177人

今回の実践に当たっては、群馬県立近代美術館での予約制、定員等を参考に、担当学芸員と打ち合わせを重ね、どのような感染対策を行って実施できるか検討してきた。富岡市立美術博物館で午前、午後定員80名とした事業はコロナ禍において初めてであったため、行政とのやり取りを含め実施まで十分な時間を取る必要があった。チラシは市内の保育園、幼稚園、小学校に配布し告知した結果、当日は若干定員を上回る参加があった。学生たちは各場所で参加者のサポートを主に行い、時間を決めて受付サポートや密を避けるブースへの誘導などを行った。各グループは6～7名の学生がいるが、消毒、誘導、制作補助などそれぞれが時間を持って余すことなく動くこととなった。これまで行ってきたノウハウを参考に、机には家族ごとに着席し(図11)、学生も参加者の材料に触れないようにしてサポートを試みた。そのような中で、参加者は思い思いの造形活動を行い、作品が出来上がると満足そうに学生に話しかける様子も見られた。また、今年初めて映像を使ったフォトスポットでは、多くの参加者が撮影を楽しんでいた。(図12) 毎年開催であれば、上級生がすでに経験した活動なので、運営がスムーズにいくが、昨年現地開催ではなかったため、学生たちは当日美術館の状況を把握し、対応しなければならないということも見られた。



図11 机には家族単位で着席する



図12 映像を使ったプログラム

②8月：太田市美術館・図書館における実践

今年初の連携事業となった太田市立美術館・図書館では、本学の「美術科教育法Ⅱ、Ⅳ」担当の森竹巳先生の個展²¹⁾開催に伴い、連携事業の打診があった。そこで、先生の作品「100均造形」に

ちなんだ身近なもので作る親子向けのプログラムを考案した。3月に群馬県立近代美術館で実施した内容をアレンジし、8月7日に開催することとなった。ワークショップ概要は以下の通りである。

【プログラム名】	カラフルスポンジで作っちゃおう！
【プログラム概要】	身近なスポンジから発想を広げてお菓子や人形のマスコットを家族で作る。
【開催時間】	14:00-16:00
【開催場所】	視聴覚ホール
【準備・用具】	スポンジ、デコレーション材料数種、ボンド、はさみ、ランチボックス、消毒液、アルコールウエットティッシュ
【実施】	アートマネジメントゼミ3年生2名
【参加人数】	19組 計56人

初めてコロナ禍においてワークショッププログラムを実施するという事で、美術館スタッフも慣れない様子であったが、事前に十分シュミレーションをして当日を迎えた。予約をせずに気軽に参加を呼びかけたことで、当日は開始前から多くの参加者が訪れた。しかし会場に入れるグループは6組であったため、整理券を配布し、時間になったら足を運んでもらうように対応した。家族連れが多く、「夏休みイベントも少ないので参加してみた。」「なかなか材料を用意できないのでやらせてもらえてよかった」という意見をもらうことが出来た。学生は材料配布、案内や誘導、制作の助言などを行い、展覧会との関連などについても触れることが出来た。(図13、14)



図13 会場の様子、作り方の説明を行う筆者



図14 完成した参加者の作品

③8月：群馬県立館林美術館における実践

8回目の開催となる館林美術館では、昨年同様夏の企画展示に合わせて、感染症対策を徹底した上で学生によるワークショップを行う準備を行っていたが、群馬県が緊急事態宣言下となり、中止を余儀なくされた。そこで、事前に参加申し込みをしていた人へ美術館側から連絡し、材料の配布のみを筆者と美術館職員で行うということで対応することとなった。当初は全て中止予定であったが、学生が4月から準備を重ねてきたこと、参加を楽しみにしている人へ少しでも美術館の学びを届けると意識で、筆者がいくつかのアイデアを伝え、材料配布に至った。当日は予定の3分の2の人が材料を取りに来てくれたため、実際に顔を見て話をすることが出来た。また、事前に学生と撮影した作り方動画を美術館ホームページに挙げてもらい、そこでも周知できるように努めた²²⁾。ワークショップ概要は以下の通りである。

【プログラム名】	オリジナルかぶとを作ろう
【プログラム概要】	企画展示「野口哲哉- THIS IS NOT A SAMURAI」にちなみ、リバーシブル紙を使って、かぶって遊べるオリジナルのかぶとを作る。
【材料配布時間】	13：00-15：00
【開催場所】	研修室
【準備・用具】	リバーシブル画用紙、ひも、穴あけパンチ、セロテープ
【企画】	アートマネジメントゼミ3年生8名、4年生6名
【材料配布人数】	18組54人

IV コロナ禍における学生の学び

それぞれの実践後に、企画、実施に関わった学生に感想を記してもらった。コロナ禍における学生の学びはやはり現地でのワークショップ体験が圧倒的に強くその学びを実感することが出来たようである。以下抽出して紹介する。なお、文末の学年は当時のものである。

1. 2020年度：群馬県立館林美術館における実践

コロナ禍でのワークショップは初めての経験で、距離感や指導方法など正解が不明の中での実践でした。本当はもっと出来栄をほめたり、触って説明したい部分もありましたが、何より館の方のご協力により対面で実行できた事が喜びでした。参加者の中には友達同士2人だけで来られ毎年参加されている方がいて、ものづくりを友達と楽しむ姿を嬉しく感じました。全体的には屋根やドアのシールを予め用意したため創意工夫の幅が狭まると懸念していましたが、マスキングテープや丸型シールによって無限大のアレンジが見られ、かえってデザインに凝り時間いっぱいまで粘る姿が多く見られました。これらの姿を見られるのが対面の醍醐味だと思いました。【4年 Sさん】

感染対策をしながらのワークショップは今回が初めてで、参加者の方と距離を取りながらのサポートでした。入れ替えの間に材料の準備や消毒を行なうのは、時間が掛かり、少し忙しかったように思います。小さい子は型紙を切ったり、貼ったりするが大変そうだったけれど、直接サポートすることが出来なかったのも、もどかしかったです。こちらで紙を押さえることが出来ず、想像より組み立てに時間が掛かっていました。少し時間より遅れて来た方で、家を組み立てる所までしかいかなかった方もいて、後は家でやってもらう形になったのは、参加して頂いたのに申し訳なかったと思いました。普段と違う形でのワークショップだったので、大変でしたが良い経験になりました。【4年 Tさん】

コロナの中でのワークショップということで、色々と制限がありましたが、館林美術館の方のご協力により無事に終わることができ感謝の気持ちでいっぱいです。ワークショップの内容については、満足いくまで装飾をする時間がなかったことは少し申し訳ない気持ちになりましたが、「家でもやってみる」という子どもたちの言葉が聞けたのでとても嬉しい気持ちになりました。組み立てる段階は、手先が不器用な子どもにとっては少し困難だったように見え、こちらから直接サポートをすることができなかったのがとてももどかしく感じました。しかし、子どもたちなりに自分の力でやってみようという意欲を見ることができたので良い機会になったと思います。このような状況だからこそ、臆せずに可能な限りの対策をしながら物事にチャレンジしていくことも大切だと感じました。【4年 Sさん】

2. 2020年度：群馬県立近代美術館における実践

≪2月≫緊急事態宣言下における開催で、実施できるのか不安がありましたが、無事に開催出来

たことが何よりも嬉しかったです。人数制限がある中でも、多くの方が予約して参加して下さったのは、これまでの先輩方が作り上げてきたものがあるからこそで、参加者の皆様に楽しんでいただけのものをこれからも作っていきたいと思いました。また、実際に自分が作ったフォトスポットで子どもたちが写真を撮っている様子を見て感激しました。参加者の皆様が写真を撮ったり、私たちに作品の解説をしてくれたりと、制限がある中でもコミュニケーションがとれてワークショップの楽しさはここにあると改めて実感した1日でした。《3月》今回は初めて自分が企画の段階から携わったワークショップだったので、最後までやり遂げられたことに一段と達成感を得ました。前回同様コロナ禍での開催ではありましたが「すごいアイデアですね」「可愛い！」など声をかけていただき、お子様からお父様、お母様まで楽しんでいただけたことがとても嬉しかったです。準備に時間がかかった分、お客様にも満足していただだけ、私たちもより一層やりがいを感じられたのではないかと思います。【3年 Iさん】

《2月》昨年度中止になってしまった企画でしたが、今回は無事に開催でき非常によかったと思います。タオルを使った作品ということで、大人から子供まで幅広い年齢の方々に楽しんでいただけたかと思っています。家族連れでの参加に限らず、男性がお一人で参加されたりと、多くの方がアートまつりに参加されていてとても嬉しくなりました。また、他のアートまつりの企画団体の方々とも交流でき、私自身もとても楽しむことができました。香る花の制作時にはお声がけをいただけて、アートによって広がる輪を感じることができました。今回の経験を次回以降にもいかせていきたいと思っています。《3月》先月に引き続き感染症対策を施した上での開催となりましたが、2回目ということもあり、消毒等は滞りなく行えたかと思っています。今回は初の3年生の企画であったため準備等で不安に思う部分もありましたが、無事に開催でき安心しました。全体を通じて新型コロナウイルス下でワークショップを開催することの難しさを痛感しました。私自身の卒業論文のテーマと関わる部分なので、今回の経験を今後活かしていきたいと思っています。【3年 Tさん】

3. 2021年：富岡市立美術博物館における実践

ワークショップを主催するにあたって大事なことは、参加者の反応を予想し、シュミレーションをするなど、下準備を徹底的にすることだと思った。そうでないとワークショップをうまく進めることが出来ないし、トラブルにも繋がりがかねない。うまく進めることが出来ないとならぬと参加者のやる気や気分も落ちてしまう。参加者の立場に立って考えることが大切だと学んだ。

【大学院1年 Hさん】

計画するだけの段階と実際に行うのとでは大きなギャップがあることを改めて知ることが出来た。また、親子に楽しんでもらう企画を考える際、安全面や難易度など、考慮しなくては行けない点が多いため新しい発見があった。

【3年 Oさん】

計画を立ててそれを実行するにはどうすれば良いのか、何が必要なのか、課題を見つけて解決しながら進んでいくことを学んだ。いろいろな問題点が準備を進めていくうちに見えてきて、それでも本番になってみないと分からないというものもあった。まずはやってみることが大事だと感じた。

【3年 Kさん】

ボランティア等で参加するワークショップの手伝いでは、問題点等考えることなく、作業のように行うが、今回のように自分たちで計画したものをを行うと、常に問題点を考え、より改善しようという意識が芽生えた。そのため常に考えて積極的、意欲的に行うことが出来た。【3年 Tさん】

企画をゼロベースから立ち上げて具体化し、実際にお客さんに体験してもらうという一連の大変さと楽しさを改めて学びました。対象が子どもということで、普段も塾講師として小学生に関わる機会は多かったのですが、一層言葉選びや視線を合わせるといった工夫を凝らしてみました。実地

でしか学べない、人が関わる温度感を肌で感じとれたと思います。

【4年 Aさん】

V おわりに

以上、約1年半のコロナ禍において、これまでとは異なるかたちでの連携事業を試みてきた。このような連携事業を実施するにあたり、各美術館には学生の受け入れ、基本的な感染症対策、ワークショップ開催時における参加者への連絡、当日の進め方など多大な配慮をしていただいた。美術館が主催する事業でも同様のことはいえるが、やはり学生の受け入れともなると、外部の団体となるので慎重な対応を必要とした。筆者との打ち合わせ等も従来とは異なる配慮点が多く、時間を要したが、それでも連携事業を継続することでコロナ禍における美術館の教育普及事業の在り方を模索することに繋がったといえる。

これまでの連携事業を通して見えてきたこととして次の2つが挙げられる。1つ目は、コロナ禍という状況でも様々な工夫をすることで連携事業は実施可能であるということである。リスクのみを考えると、連携事業そのものを実施しないほうが安全かもしれないが、それでは学生たちの学びは止まってしまう。また、美術館に来館する人々の学びも同様である。おかれている状況の中で可能な限りの実施方法を柔軟に考え、試してみることで学びを止めずに、美術館をはじめ文化施設そのもののこれからの在り方を示すことに繋がるのではないだろうか。2つ目は、様々な方法を試す中で、やはり現地での事業の実施が、最も学生、参加者双方に効果的で学びであるということを確認することが出来た。造形レシピ集や工作型紙の配布、またSNSでの情報発信などは連携事業としてかたちにはなったが、一方向であることは否めない。つまり、受け手の反応が見えないため、学生が考案、発信したものがどのように受け取られているか見えないのである。その点、現地で感染症対策を行いながら実施するワークショップ形式は、参加者の反応をじかに見て、感じ取ることが出来る。そこには双方向のやり取りが見られ、自分たちが考案したプログラムがどのように参加者に受け入れられているか、また思いもしなかった質問などに対応する中で、反省点が上り、次の実践に繋がっていくこととなる。このことは様々な活動をする中で携わった多くの学生が実感し、再確認することになったといえよう。

今後の課題としては、コロナ禍が今後も続いていく中で、効果的だった事業や方法は継続し、ノウハウの蓄積をしていくことが挙げられる。また、他館の事業などの実態も踏まえ、今後のコロナ禍における美術館の教育普及事業が目指す方向を模索していくことも必要だろう。

謝辞：本事業を進めるにあたって、富岡市立美術博物館、学芸員肥留川裕子様、群馬県立館林美術館、教育普及担当橋本美紀様、大川美術館、館長田中淳様、学芸員池田寛子様、群馬県立近代美術館、学芸員田中龍也様、太田市美術館・図書館、学芸員矢ヶ崎結花様、他各美術館関係者の方々には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

*本研究は令和2年度群馬県立女子大学特定研究費「2020年度 群馬県内の美術館連携を図る教育普及プログラムの開発と実践」、および令和3年度群馬県立女子大学特定研究費「2021年度 群馬県内の美術館連携を図る教育普及プログラムの開発と実践」を活用したものである。

註

1) 拙稿『富岡市立美術博物館における学生による教育普及プログラムの開発と実践』群馬県立女子大学紀要35号、2014、pp.115-130参照

- 2) 拙稿『群馬県立館林美術館における教育普及プログラムの開発と実践』群馬県立女子大学紀要38号、2017、pp.31-46参照
- 3) 拙稿『高崎市立美術館における連携事業の実践に関する報告』群馬県立女子大学紀要41号、2020、pp.33-48参照
- 4) 令和2年2月25日に出された「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針」以降、改正、変更等を経て、社会状況に合わせて方針が出されている。参考 URL : <https://corona.go.jp/expert-meeting/pdf/kihonhousin.pdf> (最終アクセス2021/9/16)
- 5) 令和3年2月13日施行された「新型インフルエンザ等対策特別措置法施行令」では、「第六条 法第三十二条第一項の新型インフルエンザ等緊急事態についての政令で定める要件は、都道府県における感染症患者等の発生の状況、感染症患者等のうち新型インフルエンザ等に感染し、又は感染したおそれがある経路が特定できない者の発生の状況その他の新型インフルエンザ等の発生の状況を踏まえ、一の都道府県の区域を越えて新型インフルエンザ等の感染が拡大し、又はまん延していると認められる場合であって、当該感染の拡大又はまん延により医療の提供に支障が生じている都道府県があると認められるときに該当することとする。」とある。
- 6) 注5) の法令において「2 法第三十一条の四第一項の新型インフルエンザ等まん延防止等重点措置を集中的に実施すべき事態についての政令で定める要件は、当該新型インフルエンザ等まん延防止等重点措置を集中的に実施しなければ、(中略) 当該都道府県において新型インフルエンザ等の感染が拡大するおそれがあると認められる場合であって、当該感染の拡大に関する状況を踏まえ、当該都道府県の区域において医療の提供に支障が生ずるおそれがあると認められるときに該当することとする。」とある。
- 7) 首相官邸では三つの密として密閉・密集・密接を挙げ、人混みを避けることや、屋内のみでなく屋外でも同様に注意すべきと喚起している。参考「3つの密を避ける手引き」URL : <https://www.kantei.go.jp/jp/content/000062771.pdf> (最終アクセス2021/9/16)
- 8) 安倍総理大臣は2020年4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言を行い、4月16日に対象を全国に拡大した。5月25日に首都圏1都3県と北海道の宣言が解除され、全国の解除に至った。この間多くの美術館が各都道府県の要請に従い休館となった。参考 URL : <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/emergency/> (最終アクセス2021/9/16)
- 9) 文化庁参照 URL : https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/sonota_oshirase/20200206.html#info03 (最終アクセス2021/9/16)
- 10) 「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」においては「リスク評価」について「施設管理者は、新型コロナウイルスの主な感染経路である①接触感染、②飛沫感染のそれぞれについて、従事者や来館者の動線や接触等を考慮したリスク評価を行い、そのリスクに応じた対策を検討することが求められます。」と記され、さらに「③集客施設としてのリスク評価、④地域における感染状況のリスク評価」も記載されている。
- 11) 文化庁、前掲
- 12) 群馬県知事戦略部メディアプロモーション課では群馬県動画・放送スタジオ「tsulunos (ツルノス)」を県庁に設置、ホームページでは様々なカテゴリーの動画を配信している。その中で教育・文化・スポーツ関連では2021年9月現在214本の動画が掲載されている。参考 URL : <https://tsulunos.jp/> (最終アクセス2021/9/16)
- 13) 2021年9月現在全国の約230の館が参加、ホームページでは一堂に各館のコンテンツがみられるようになってきている。参考サイト : <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/ouchi-museum/> (最終アクセス2021/9/16)
- 14) 2017年のみ筆者の産前産後休暇のため授業は休講となり、実践は行っていない。
- 15) Padlet というオンライン上でひとつの画面にいろいろな人が文字を書いたり写真を貼り付けたりできる教育ツールを使い、学生たちが作った作品も掲載中した。投稿した人には教員や学生からコメントが寄せられるとしたが、実際に投稿してくれた人はいなかった。参考 URL : <https://padlet.com/okunishi/ia9z65av37aqrd4u> (最終アクセス2021/9/16)

- 16) 「飛べ！カイコ！」は3000枚印刷し、市内小学校に配布した。また、「ぐんまちゃんのわくわくファッションショー 福沢一郎コレクション」は表裏の型紙を切って折ると本の形になる塗り絵のため4000枚印刷し、市内幼稚園、保育園、小学校に配布した。
- 17) 美術博物館 HP には2021年3月までそれぞれの型紙が挙げられていた。
- 18) 動画撮影は学生が行い、編集は美術館学芸員が行った。<http://www.gmat.pref.gunma.jp/forkids/fk8.html> (最終アクセス2021/9/22)
- 19) Twitter, Facebook, Instagram の3つを活用しているため、すべての SNS に情報を挙げてもらった。
- 20) 2020年度の連携事業の様子の詳細は『群馬県立女子大学文学部美学美術史学科アートマネジメントゼミ 連携事業記録集』(アートマネジメントゼミ編2021年)にまとめている。
- 21) 2021年7月31日～10月24日まで当美術館で「森竹巳-造形実験の軌跡」が開催されていた。
参考 URL : https://www.artmuseumlibraryota.jp/post_artmuseum/7967.html (最終アクセス2021/10/1)
- 22) 参考 URL : <http://www.gmat.pref.gunma.jp/forkids/fk8.html> (最終アクセス2021/10/1)

【図の出典】

筆者撮影 (図1～図12) 太田市美術館・図書館 (図13～14) なお、出典にあたり、学生及び参加者、美術館関係者には承諾を得ている。

